

し さん じょう
紫禁城の
ひ みつ
秘密のともだち



しん じゅう
神兽たちの
ちから
ふしぎな力



チャンイー
常怡作
小島敬太 訳
おきたもも 絵



はじめに

みんなは学校が終わったらどんなところであそんでる？ 運動場？ それとも公園とか？ そこは、もしかしたらすごく広いところかもしれないね。でもどんなに広くても、きつとサッカーグラウンドくらいの大さじゃないかな。

じゃあ、質問。わたしが放課後にあそんでいるのはいったいどこだと思う？

わたしがいるのは、サッカーグラウンド一〇一個分の広さの、びっくりするくらい大きな宮殿。名前を聞いたことある

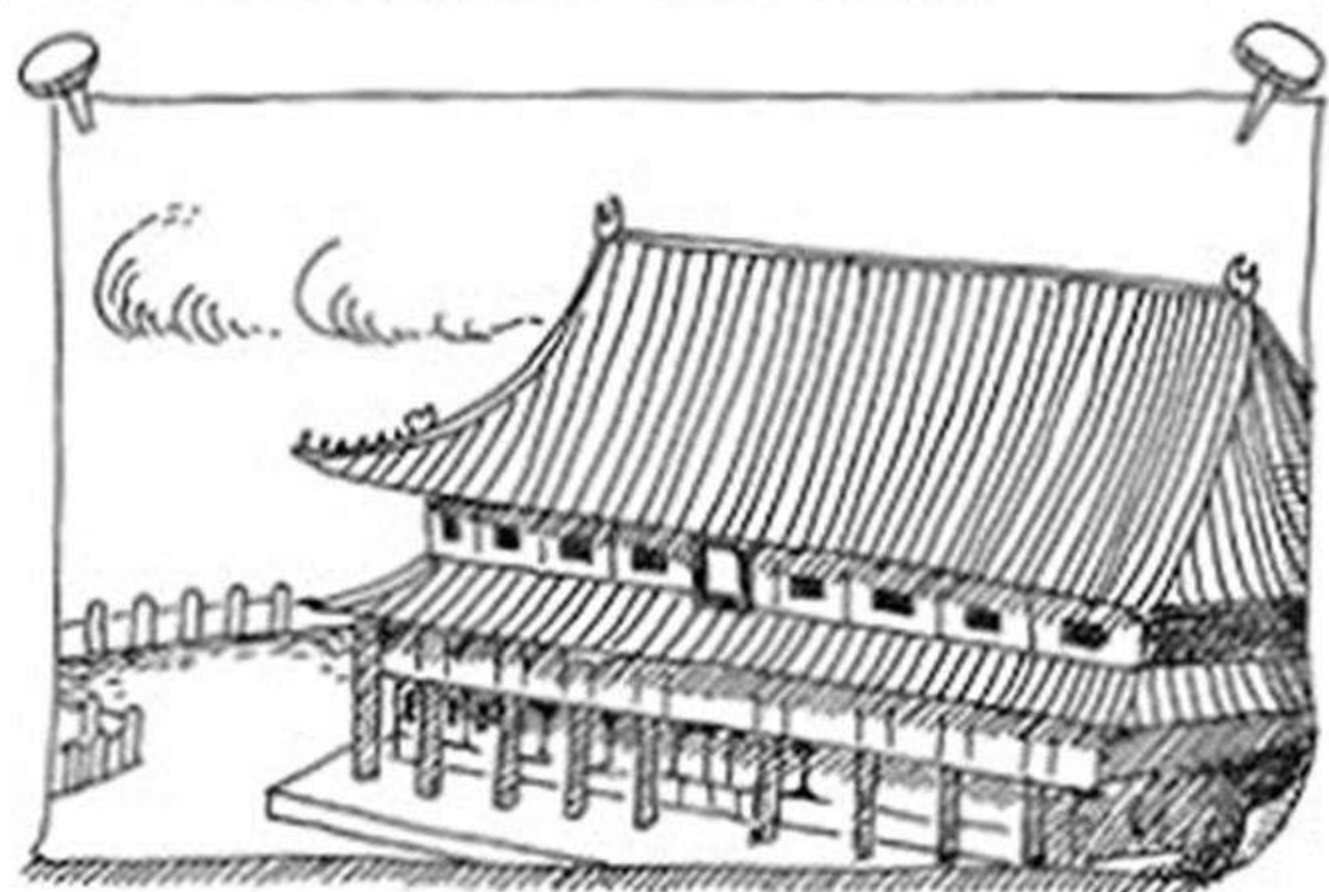
ひともいるんじゃないかな。紫禁城っていうんだ。

なんで、そんなところにいるのかっていうと、ほかに行くところがないから。

わたしの名前は李小雨。いま十歳で、身長は一四五センチ。身長が一二〇センチを超えたら入場券がいるのに、毎日ただで紫禁城の中に入っている。お母さんが紫禁城の文物倉庫の保管係をしているから、入場券なしで入れるんだ。お母さんはすごくいそがしくて、いつもおそくまでしごと。だから、放課後は家に帰らずに紫禁城に行くしかないってわけ。ここにはクラスメイトも、あそべるようなともだちもないけど、さびしいなんて思わない。だって、二百ぴき以上もねねがいて、シエパード犬も九ひき。ほかに、数えきれないほどの動物がいるから。ネズミでしょ、ハリネズミに、ハト、カササギ、あとカラスも……。

ねことはとくになかよしだ。北東の角楼の下にいるペルシャねこの小黄、珍宝館にいる白ねこの小藍眼児。お母さんがいうには、みんな、むかし紫禁城に住んでいたお妃さまたちの飼いなこの末裔で、つまり高貴な「宮ねこ」の血が流れて

1 ようこそ 神獣たちの会合へ



梨花^{りっか}「つたらどこに行つたんだらう？」
片手^{かたて}にはねこ缶^{ねこかん}、もう片方^{かたほう}にはビタミ
ン剤^{ざい}。汗^{あせ}びっしりになつて走りまわつ
たけれど、梨花^{りっか}のすがたは見つからない。
閉館^{へいかん}時間^{じかん}になつて、観光客^{かんこうきゃく}の最後^{さいご}のひ
とりが出ていった繁華^{はんか}は、壁^{かべ}を吹きぬ
ける風の音^ねまで聞こえるほど、ひっそり
と静まりかえつてゐる。
梨花^{りっか}がいなのは、わたしにとっては
ちよつとした事件^{じけん}だった。あんなに食^く
意^い地の張^はつた梨花^{りっか}が晩^{ばん}ごはんの時間^{じかん}をま
ちがえるなんてありえない。いつもだつ
たら、晩^{ばん}ごはんの一時^{いっし}間^{かん}も前^{まへ}から、おさ
らの前^{まへ}にしゃがんで、つめをなめて待つ

るんだつて。

なかでも、いちばんの親友^{おんなじとも}は梨花^{りっか}。梨花^{りっか}っていろいろ名^な前ののらねこ。わたしは繁華^{はんか}で
ミネラルウォーターのペットボトルを拾^{ひろ}つてお金^{かね}に替^かえて、梨花^{りっか}にねこ缶^{ねこかん}を買^か
つてあげてゐる。

梨花^{りっか}はきれいなお白^{しろ}なだけ、ひと一倍^{いっばい}食^く意^い地^ちが張^はつてゐて、いろいろも食^くべち
らからして、最近^{さいきん}は口内炎^{こうないえん}もできちやうたみたい。だから今日^{けふ}は梨花^{りっか}のためた、半^{はん}
粒^{りゅう}が溶^とけたらまうとちやうた。梨^り同^{どう}だ。ビタミ^ン剤^{ざい}を買^かつて繁華^{はんか}でやつてきた。なか
らねこを拾^{ひろ}つても、梨花^{りっか}が見^みえたらならぬ。おかしいなあ……。

てるはずなのに。梨花になにかあったんだらうか。

わたしは思わず、名前をさげんでいた。

「梨花！ 梨花！」

そのときだった。どこから、少しこもったような、

むにゅむにゅと聞きとりづらい声が聞こえてきた。

「ミヤオウ……」

どこからそんなに遠くない、大和門の裏側のあたりからだ。門のむこうには大

きな広場があるから、そこに梨花はいるのだらう。きう、このむにゅむにゅは

梨花にちがひなかつた。口内炎のせいで、はつきりした鳴き声が出せななんだ。

紫禁城のねこで口内炎があるのは梨花だけだった。

わたしは大和門をくぐって、勢いよく広場に出た。けれど、ねこの影はない。

また声だけが聞こえる。

「ミヤオウ……」

声は広場の奥にある宮殿に向かっているようだった。紫禁城でいちばん大きな

太和殿という宮殿だ。声を追って、わたしも走りだす。空は夜に向かって、だんだんと暗くなっていた。太陽が遠くの山のほりにしげんでいき、夕焼け雲のまわりをふちどっていた金色の光も少しずつ消えていく。

太和殿の石段が近づいてきた。真っ白な大理石でできたこの階段を上ったところに梨花がいる。と思ったそのとき、視線の先できらりとなにかがひかした。なんだらう？ 近づいてみると、うすぐらい石段の上には、青い宝石のついた小さなイヤリングが落ちていた。落とした物というよりも、まるで、宮殿の屋根から音もなく舞いおちた露の玉のようだった。すいよせられるように、

わたしはイヤリングを拾いあげた。手のひらにのせ、じっと見る。なんてきれいな宝石なんだらう。

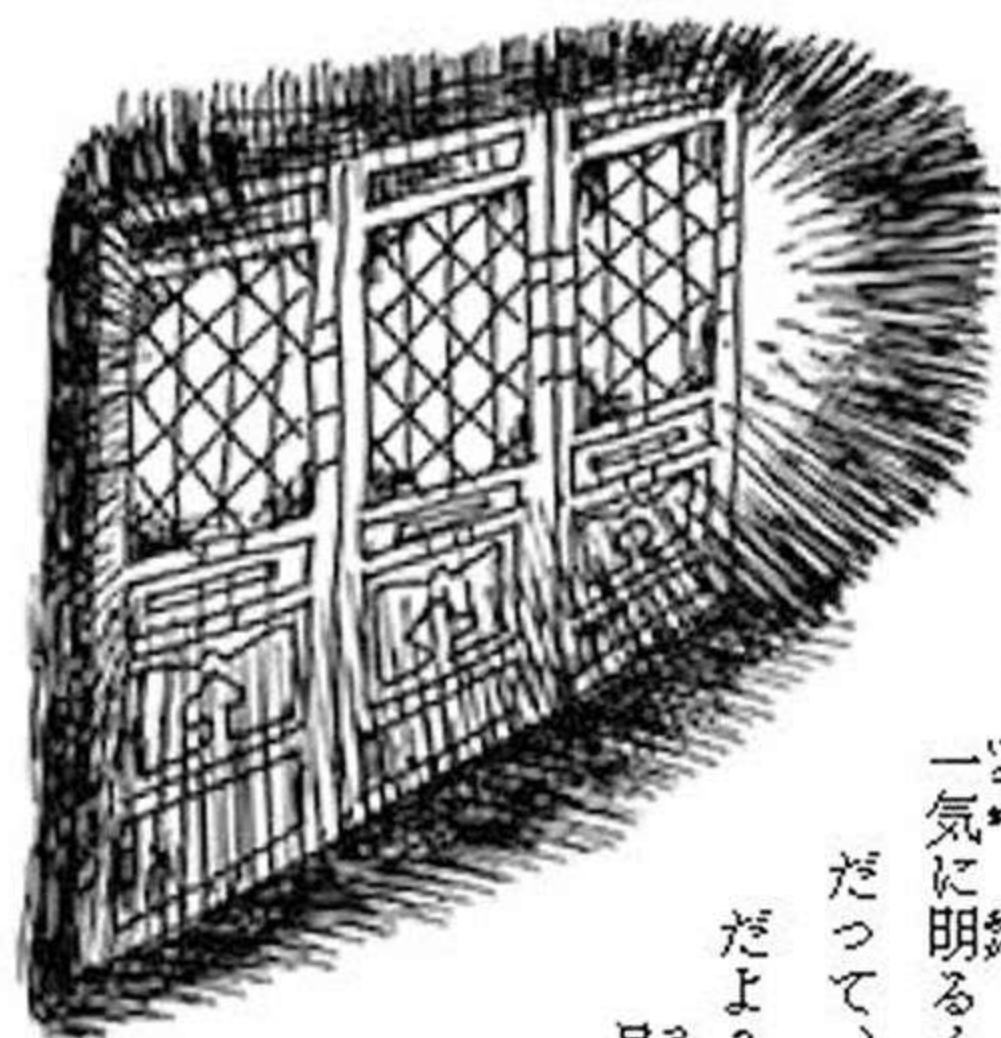
あまりの美しさに、息をするのも

わすれてしまいきらうだった。いったい

だれが落としたんだらう？

「拾った物は遺失物センターへ」もちあちん、





それくらいわかっている。だけど見つめてみると、自分の耳につけてみたい気持ちがかんどうとん大きくなってくる。

ちよつとくらいつけたってだいじょうぶだよ。きつと、一瞬だけなら、ね？

心の中でそういいわけをして、右耳にそつとイヤリングをつけてみた。その瞬間、耳たぶがきゆうに熱をもったように、カーッと熱くなった。えつ、なに？　びつくりして、すぐにイヤリングを外した。

ちようどそのときだった。白いなにかが太和殿の前をシユタタツと通りすぎていくのが目に入った。まちがいない、梨花だ。とつさにイヤリングをポケットにつっこんで、大急ぎであとを追いかける。

「梨花、おいで！」

わたしの声だけが、がらんとした広場にひびきわたる。それ

なのに、梨花はとまろうともせず太和殿の奥へまっすぐ走っていく。

もう、なんてやんちゃなのらねこ！　つかまえたなら、お説教しなきゃ！

梨花を追って、太和殿の奥に入ると、太和殿より小さな中和殿が見えてきた。気づけば、空はすっかり、暗くなっている。目をうたがう光景をわたしが目撃

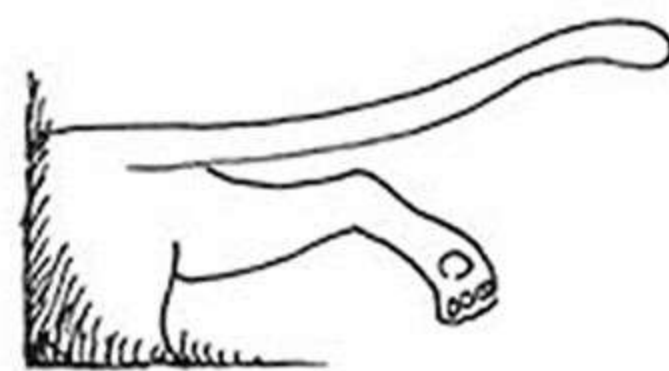
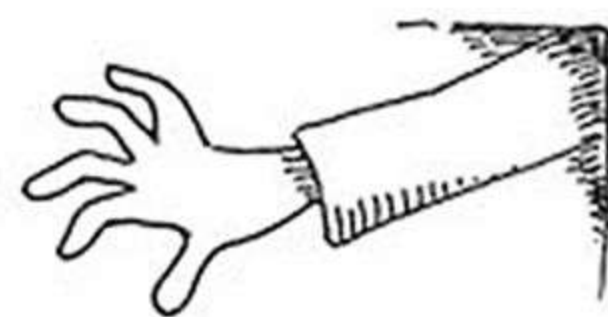
したのはそのときだった。

暗いはずの中和殿の窓から、とつぜん、まぶしい光があふれだし、一気に明るくなったのだ。わたしはおどろいて足を止めた。

だって、中和殿には電灯なんて取りつけられていないんだよ？　もしかして中にだれかいるのかな。

月の光か、ろうそくの炎か、とにかくかきかいた。ではなさそうだけれど、怖くは感じなかった。

それよりもわくわくのほうが大きかった。見たことのない世界がすぐそこに待っているような、去年の夏にはじめてデイズニー





ランドに行ったときのあの感じ。
 ときどきしながら、中和殿の窓に
 はりついてそっと中をのぞいた。そ
 こにいたのは……えっ、なに、これ？
 わたしはその場で固まった。そこ
 には、大きくて不思議な生き物たち
 がいた。巨大なライオンのようだっ
 たり、龍みたいだったり、頭に角が
 生えてたり、猿みたいだったり、翼
 の生えた白い馬だったり、いろいろ
 なすがたをしている。それぞれ、体
 から白くたまごしい光を出しながら、
 輪になって、中和殿の床の上にな
 わっている。

いったいどういうこと？ わたし
 はいま、なにを見ているの？ もっ
 とよく見ようと、壁にそって中のよ
 うすをのぞきながら、中和殿の入り
 口に近づいていった。空に浮かんだ
 月の光がわたしの背中をうしろから
 そっと照らしている。

わたしには気になることがあった。
 それは、この巨大な生き物たちをは
 じめて見る気がしないということ。
 どこかで見ることがあるみたいなん
 だけど……うーん、考えてもわから
 ない。中和殿の背の高い入り口の前
 で立ちつくしながら、ふと空を見上